

透徹したものであつた、或問題に就て通告し協議すべき場合、關係者を一時に招集して談する方が有利であると思つた際は、漏れなく一同を一室に集めて懇談した。若し又別々に話した方が得策であると思つた際は、順位を重んじ上位者より一々机邊に招致して懇話し指圖した、其訓令通告固より一糸亂れずであつた、余の大坂より現職に就任したのは大正六年五月八日であつたが、此月二十一日の夜、某船會社員を兵庫常盤花壇に邀飲したことがある、主客實に二十一名、左迄多人數ではなかつたが、随分鄭重な宴會であつた、此宴會の前日の午後である、君は余の机邊に來て、當時に於ける某船會社と本店との關係を詳述し、宴會を開催するの必要なる所以を説いて余に十分の概念を與へ、開宴に際し一場の挨拶を爲すべきことを命令した、之は余の本店に轉勤して頭初に參列した宴席と記憶する、而も余の挨拶が脱線的失體を演じなかつたのは實に君が用意周到の致す所であつた、左れば余が挨拶を遣つたものゝ、實は君が之を陳べた様なものであつた。

店頭余の使用する机は、蓋ふて錠する様になつて居る、君の用ひしものと同一の様式である、朝夕店童が之を開閉することにして居る、處が一朝鍵が紛失した、然る

に其合鍵は宅に置いて出勤した、余は是に於て當惑した、君傍に在り合鍵は如何と余は宅に在ることを答へた、君其財囊を示して曰く、僕は合鍵を常に此中に容れて居ると、余は覺えず其注意深きに感服し、一教訓を受けしことを鳴謝した、其物品を人に贈る場合の注意は亦格別であつた、必ず先方の人格に相應するものを選定するに於て大に苦心したものであつた、余は君と最も昵近であつた、余が君に何物か贈りしとき君必ず答禮をする、其場合は特に先づ返禮用の物品の梗概を遠廻しに話して、箇様のものは如何抔余の評語を聴取し、余の意中を忖度せられたこともあつた位である。

君の奥床しさは亦一段であつた、君の長女ふみ子嬢が縣立高等女學校に入學したのは大正八年の春の様に記憶する、此時の募集數は百四十名で、入學志願者は五百七十一名であつた、其比例は一對五強である、乃ち君の愛嬢は入學志願者の一員であつた、普通人なれば斯る場合には必ず之を人に語るが常である、然るに更に語らず、從て余も知らなかつたのである、箇様君の人に語らざりしものは、深く愛嬢の人格を重んじた慈父の至情の發露であると思はれた、然るに一日令夫人より卓上

電話に信號が來た、君聞き終つて曰く、這入た這入た、平素の溫顔に更に愛を湛へて、眞に名狀し得ざる態度であつた。岡君と云ひ余と云ひ實は一室に在りて内輪同様である。然るに入學受験を語らずして、入選始めて之を談じたる君の襟度は、深沈重厚で奥床しき限りであつた。

幾千の職員は時々本店に來往する、中には偶々余を知りて君を知らざる者もある、其入て謝して出づる者、唯余の机邊にのみ來りて君に禮せざる者もある、余は是等の諸君に對しては、或商店の廣告ではないが、鴻儒仁齋先生が寺門に入りては佛前に禮拜したと云ふ先哲叢談に在る大雅量の一節を煎じて服ませたいと思ふたこともあつた、何様是等の諸君は其年齒多くは三四十臺に達し、分別盛の人々である、畢竟這般の禮儀は最早他の教を待つて爲すべき年輩でない、自發的に悟入すべき筈であるから、放任して何も注意をせなかつた、然るに君は平然として何とも言はなかつた、余は其雅量に學んだことは少くなかつたのである。

職員間に於て意見を異にせし場合、其裁斷を君に要めるのは中々頻繁であつた、此際君は常に兩者の主張を聴取して毫も自己の意見を陳べず、從容自若、葉卷を吹

きながら専ら聞役となり楫取りとなりて、波瀾の平靜を待ち調停港を發見せしめたのは、一種の手腕であつたが其德望の致す結果でもあつたと信ずる。

在店前後二十有七年、君は恪勤精勵した一重役は多種多様の事業を計畫し、一重役は砂糖一徹今日の大基礎を構成した、然るに此間君は如何なる事業を残したてあらうか、余は此に至つて常に唐史の一節を聯想する、即ち

司空梁公房玄齡卒。上悲不自勝。玄齡佐上定天下。及終相位三十二年。號爲賢相。然無迹可尋。上定禍亂。而房杜不言功。王魏善諫諍。而房杜讓其賢。英衛善將兵。而房杜行其道。理致太平。善歸人主。爲唐宗臣。

嗚呼君は鈴木商店の房玄齡にして杜如晦を兼たるものであつた、其迹の尋ねべきものなき所は乃ち君の本領にして、金柳二氏と鼎立し鈴木商店の柱石たる所以であつた、主母夫人の當時悲んで自ら勝へざりしものは亦當然である。

君の永眠は余に於て師友を失ひし感がある、當時余は人目を憚らず熱涙潜々として男泣きに泣いた、余としては師友たる君を失ひし爲め泣きしは勿論であるが幾千店員の爲め泣かずに居れなかつたのである、君の亡後余は幾んど健康を害す

るに至つた程である。君が定命にも達しないで白玉樓中の人となるを知り得たならば、縦令病中たりとも余の胸臆を君に吐露すべきであつた。今や遺影活けるが如きも言を交ふるに由もなく、新樹再び翠にして墓標唯存するのみである。人生の悲哀も此に至れば窮極と謂つて可い。

追

懷

書

簡

(一)

肅啓尊臺御清安奉大賀候故西川文藏先生逸事早々御報達仕る筈の處小生今夏以來健康を害ひ又々入院中其意を得申さす別封(長詩二首清人の寄せしもの)宜しく御了讀被下度候尙一言にて盡せば西川先生は小生等一家九人の恩人に御座候何れ明春二月頃には元氣上神拜眉の上萬々陳謝々々先は右要用迄 拜具

大正九年十二月十八日

津市立病院六病舎七

石 鴻 元 (續木介壽)

森 先 生 清 臺

贈石鴻元畫伯

覺齋呈稿

四國續木子、別號稱文湖、幼少懷高志、讀書慕前儒、

書生貧何害、不願長守株、習畫二十年、水墨反三隅、
西川文藏翁、烟眼發其美、由之揚清芬、飛聲偏遐邇、
自是好因緣、獲知賢俊士、今年春二月、載筆來漫游、
閒寂勅使道、高館清且幽、興到始撥墨、催索皆名流、
爲余寫新篁、雙莖雨後抽、彷彿聞殘滴、清風動修々、
子畫誰可及、子格孰與儔、願言加努力、何患志不酬、

贈 文 湖 畫 師

翁 庵

文湖畫師短小身、腕力足挽弓六鈞、君今寫竹遺何人、
近作無此精絕倫、君言廿載禿筆親、窮居不患甑生塵、
每向空潭垂釣綸、生涯笑殺東西隣、偏得藏翁相愛頻、
吹噓口角生陽春、泥古雖招時輩顰、翁亦併持不緝磷、
客中懷翁興忽新、寄翁此竹翁應珍、恍然坐我清渭濱、
滿林晴翠侵衣巾、世間孰辨玉與珉、得一知己君莫瞋、

(二)

拜復益々御清昌奉賀候陳者六月五日附御芳墨落掌故西川氏追懷錄御發行の爲め
今回同氏生前の逸事御蒐集の事御發表相成候趣拜誦誠に結構の御企と奉存候就
而吾々共にも何か氣附の點申送れこの御要求に有之候が同氏生前の御起居其他
に就ては吾々共の如く長く海外在住の者よりは内地に一層御昵近の方々も多く
其方面より萬事は申盡さるゝこと愚考罷在候間茲には同氏が生前如何に鈴木
商店の爲め努力せられしか又其熱誠が同氏歿後の今日迄如何に吾々共の頭に深
く印象され居るやに付て御企畫の一助にもと存じ左に極最近故人との夢物語を
御聞に入れ可申候

昨七月五日は米國第一の祭日たる獨立祭當日(例年は四日なるも今年は五日に繰
延)とて店中打揃ひ近郊に旅行致候其歸途渡船中にて疲勞の餘り睡眠中場所は確
か本店支配人室と覺え候が故西川氏と小生との對談に始まり申候

小生「家の要事で東京へ一兩日旅行を致したいと思ひますが御差支は御座いますまいか」

西川氏「えゝいゝでしよう然し勝屋君東京へ行くんなら餘程氣を附けて呉れないと困ります」

小生「夫れは何故です何か特別に注意をする必要の事でもありますか」

西川氏「いや別に込入つた事ではないんですが私がたまに東京へ旅行でもすると同窓の三井に居る武田？と云ふ男が煩く附纏つて店をかはれと勧めるのです此間も横濱の店の者が外でやられたと云ふ事ですから下らぬ話に耳を藉さない様に頼みます」

小生「あゝ左様ですか承知しました」

所謂夢物語なるものは之にて終り居り候が如何にも筋道の附きたる物語にて小生未だ斯の如く整然たる夢を見たること無之船中皆々にも話し一切り西川氏の追憶談に花を咲かせ申候

是れは同氏生前の熱誠今猶吾々共の頭に深く沁込居候事に間違なくと存候が餘

りの不思議に感じ茲に御披露申上候

乍末追々大暑も近付き候へば一層御自愛專一に願上候 敬具

大正九年七月六日

在シヤトル

勝 屋 利 秋

森 衆 郎 様 貴 下

(三)

拜啓益御清祥奉大賀候陳者故西川氏の行狀逸事を集め追懷録御編輯の由就ては
小生等に材料御照會被下候得共既に定評ある故人の高潔なる人格隨て其行狀等
に就き小生等より蛇足を加ふる事却而失禮かと存候唯小生の責塞ぎとして故人
が暗算の名人なりし事に就き嘗て故人と大笑致したる話を御報申上候
故人の明晰なる頭腦を以てして暗算に達し居られしは周知の事にて小生先年印
度旅行中甲谷陀郵船支店長(現紐育支店長)にて故人と高商の同期生たる大谷登氏

と會談中故人の噂に移り故人在學中暗算に於て全校中肩を竝べる者なく恐るべき頭腦の人なりと深く感心致居候歸朝後故人に偶然此話を致し候處故人大に笑ひ崩れて

僕は實際郷里の商業學校時代より算術殊に暗算は得意にて高商入學と同時に郷里の商業學校の算術の先生が又高商に轉勤せられたり先生は自分の教へた郷里の商業學校卒業生を自慢して算術の時間には必ず複雑なる暗算の問題を出すも誰れあつて答へ得るものなし此時は必ず僕を指名するので立ろに明答すはから全級生悉くペロを巻き實に痛快であつた

と申され候右は追懷錄に載せる價值無之候得共たゞ貴臺迄責塞ぎに御報申上候次第に御座候 勿々

大正九年七月八日

新嘉坡出張所

大久保彌十郎

森 衆 郎 様 侍 史

(四)

思故支配人西川文藏氏

掃きあけてとつ一葉散る庭のおも

謹啓益々御健勝に被爲渡慶賀此事に奉存候陳者故西川支配人殿の行狀逸事等御
編纂の御事誠に結構に奉存候間是非何か駄稿御採用方熱望仕候得共御指定の期
日も最早過ぎ居り且偶々商用の旅上にて此度御芳書拜見仕候様の次第甚だ遺憾
千萬に候も其意を得不申候不惡御容し被下度奉願上候右駄句一片は嘗て昨秋故
人を追慕致せしものに御座候故人は我が鈴木商店の元勳者として店員の御指導
常に偏重なく其宜しきを得させられ各人の敬愛を一身に集め給うて今日の大に
資せしめられ爾來益々其基礎の堅實を畫圖せられしものを惜しい哉一朝二豎の
冒す所となりて復た起ち給はずなりぬげに追惜已まず駄句りて自ら其情を遣り
申候次第幸尊覽を得て故人を偲ぶこと亡き御靈に通ずれば満足に御座候

敬白頓首

大正十年一月二十日

桑港出張所

中川二郎

本店支配人

森衆郎様侍史

(五)

謹啓仕候故西川支配人の逸事御編纂の趣を以て御玉章を忝うし誠に恐入申候私
 は入店前より故人の御愛顧に浴し居申候も入店後は地方の工場に勤務致候爲め
 本店に在りて朝夕親しく故人の聲咳に接し直接御指導を仰ぐ機會に乏しく随つ
 て御寄稿申上べき多くの資料を有し申さず候も思ひ浮び候數節を左に可申述候
 故人が下僚を遇すること懇切なるは實に敬服に堪へず候其一例を申さば私等が
 甲地より乙地へ轉勤する如き場合は新住所の沿革歴史より延いては前住者の衝

突せし暗礁等に至るまで一々垂示せられ陰に陽に御助力を賜ひしこそ一方ならず候これ全く故人が人に對して温情厚く又事業其ものに對する愛好熱烈の麗しき發露と存候或時の如きは血氣旺盛なる年若き一二の店員が多少仕事を遣り過ぎ候事有之候が仕事に對する禍根を斷つことに就ては徹底的に何等假借する所なく處斷せられしも當事者の進退の問題に至りては全然別人の如く寛容の態度を以て之に接し本人の將來を顧慮し其罪を惡みて人を惡まず滿腔の恩義を傾倒して之を指導せられ候故に其人反感を懷かずして悔悟し却つて其德風に敬服し大に反省努力するに至り候これ故人が能く三千の店員を統御して欽仰の中心となられ候所以の一例かと奉存候

本稿を草するに當り往時を追憶して景仰の情特に切なるもの有之候謹て故人の冥福を奉祈候 敬白

大正十年一月十一日

戸 坂 隆 吉

森 支配人殿虎皮下

(六)

拜覆故西川支配人に關し此度御生前の行狀逸事を蒐集御編纂相成候御企畫は御文面にも相見え候通り御遺族に對せらるゝ最善の御思附にして將又故人在世當時の周圍關係者に取りても追慕の資として之に過ぎたるもの可無之と存候。恰も御書面に接し候節は時入梅に當り天候自ら濕やかに感想の一層切なるを覺え候唯生等後輩にして殊に多く出張所詰と相成居たる者は聲咳に接せし時日比較的少く御行狀乃至逸事の如きも御徵集には敢て當り難く候得共同じ後輩にしても小生は幾分年數の永かりし丈け其御温容に接せし度數は割合に少からず別けて一身上の私事に對して故人を煩はせし點は淺からず爲めに其感慨は人一倍かゝ存候

顧れば早や一昔と相成り候小生入店間もなく福州出張所詰を命ぜられ歸來健康上に頗る悲觀を呈せし際の如き反然として覺省せしめられたる一事は小生に取りて深刻なる記錄に御座候其當時論されたる語句中に「浮世三分五厘」の一句あり

故人の如き爲人の口を藉りて初めて價値を覺えたる位に候近くは老衰の病母に侍して歸省中慰撫と同情を與へられたる實に幾度なるを知らず其語は毫も世辭を交へられず、文に信實あり慈父か友人にあらざれば得られざる概あり而も之を先達者に得たるは眞に仰ぎて憾なきを思はしめ候

世に多人數を使用し若くは率ゐる多くの先達者は各其特長に對して敬慕され將服従さるゝもの有之候得共故人は然らず候其言行に些の表裏なく將又公私の辨別最も鮮かにして寧ろ畏敬の念を抱かしむる位なりしも而も事實は却て親みを覺えさせられたる全く信實の然らしめたる點にあらざるかと存候蓋し全人格を以て人に對せられたる爲めにして眞面目は其全人格なりし様被存候
以上故人に關する御徵草には副ひ難く候得共感愴に堪へざる儘を右迄如斯御座候
敬具

大正九年六月十二日

篠原祐喜

森衆郎様侍史

(七)

拜啓愈御清適慶賀の至に奉存候陳者故西川文藏様の德行逸事御編輯の趣を以て寄稿方御下命下され候處年末年始以來門司山口宇品吳等への用務相重り引續き東奔西驅の間に消光致居り怠慢の罪偏に御寛恕を奉願候

顧れば初めて同氏に拜眉を得候は大正四年九月榮町の舊店舗樓上に有之候而して鈴木商店の支配人と申すからには見るからに所謂「奇畧縦横」の方ならむこの小生の豫測豫備感情は其靜かにして寡言而も恭心を人の腹中に推す御性行の閃きに壓せられ省みて自らの不都合なる想像を愧ぢしここに御座候其後間もなく小生は只今の播磨造船所へ轉勤を命ぜられ候ひしまゝ常に私に敬慕措かざりし同氏の大なる御人格に觸るゝ機會乏しく相成候ひしも居常其高風を懷ふ事洵に切實に有之候ひき曾て播磨へ轉勤の際西川様より其命を承り候とき「當分でよいから」その御言葉に對し狷介なる小生は不遜にも「當分でなく其地に骨を埋むる積り

でやつて下さい」と申上候處例の御温情に満ちし御顔容に微笑を湛へつゝ君としては其積りで行つて呉れとて種々同情深き御指命を賜り候ひき今にして顧ふに如何に眞劍なりしにせよ黙して御受けすべきを態々自らの「誠意」を強ひて表白したる小生の人格の卑小を憐まざるを得ず候自然の人天真の人大なる人人格の人としての西川様は小生の生涯に大なる感激を與へられ居り候追慕の情切々たるもの有之候得共旅中特に筆硯の便を缺き所懷盡すべくもあらず残念此事に御座候亂毫を驅り候次第切に御海容を奉願候　頓首

一月十六日朝

宇品陸軍運輸部の一室にて

播磨造船所

北村徳太郎

森　衆　郎　様　玉　机　下

(八)

多年甘酸を共にして、今日の鈴木商店を築き上げられた同勞者を失はれた、あなたの御愁傷に心から御同情申上ます、私も、鈴木家の爲め邦家の爲め、西川文藏君の長逝に、痛恨の思を爲した一人です。

承れば、あなたは這度、逝いた親友の傳記や逸事を蒐めて鉛槧に付し、之を親戚や故舊に頒つて故人の在りし日を偲ばれやうこの御思召の由、誠に麗しき御企畫、これ以上故人を喜ばす供養は他になからうと存じます。而して其數頁を不肖な私に割愛されまして、何かの追懷を記せこの御命令を得ましたのは、私にとつて無上の光榮と存じ、深く感謝致します。

明治三十二三年の頃、私が鈴木家に出入を始めたそもそもから、私は故人の知遇を辱うし、毎時御世話になるばかり、未だ曾て何の御役に立つたこともなく、終に報恩の機會を永久に逸し去つてしまつたのは、終生の恨事として感慨に堪へないところです。

故人が、あの著しく大きな頭腦の裡に、非常に精妙巧緻な靈能を包藏され、其からくりの運轉たるや、極めて圓滑且正確であつたことは、多士濟々の鈴木商店は愚か、全

國實業界にも稀に見る所であつたのです。

故人は、其冷靜にして明晰な數理的頭腦の他に、燃ゆるが如き愛情を、心の奥深く潜めて居られましたことも、故人に親炙した者の齊しく認むる所です。其熱愛が發露しては、溢るゝ如き友情となり、同情の涙となり、包容ある雅量となり、さては閑雅な趣味となつたのです。

故人が、能く實業家として大なる貢獻を邦家に致し、多數の部下や友人から欽仰の標的となり、また藝術の批判鑑賞に於て一家を成し得られたのも、皆其冷靜なる頭腦と熱烈なる愛情との、自然なる流露の結果に外ならないと信じます。

然し、故人の性格や事業の方面を正確に描くには、他に適當なる方々があると思ひますから、私の筆鋒は少し脱線させて戴きます。謹嚴なあなたは、屹度眉を顰めて苦笑せらるゝかとも思ひますが、御承知の通り凡ゆる機會に、ジョークを弄せねばやまぬ剽輕者の私なんですから、御容赦を願ひます。

偉人と凡庸との間に、共通點のあらう道理は御座いませんが、唯一つ故人と私との間に共通のものがありません。それは西川と云ふ姓を同じうして居ることです。

古くから鈴木家に御出入をして居るものですから、時々こんだ錯誤が起り、人もあらうに私のやうな者が、鈴木家の大柱石と間違へられて、大に恐縮の思をしたりしたことが度々あります。英國から來た私の友達が、私の宅だと思つて故人の私邸を襲ひ、大に厄介をかけたこともあります。故人に對する案内狀が、慌て者の私の處に舞込んで來て、こんだ茶番を演じたこともあります。或る大家で鄭重な御馳走を戴き、それからあと秘藏の書畫骨董の數々を取出して、特に其鑑識を囑望され、冷汗淋漓倉皇として逃出したこともあります。

かう云つた數々の錯誤は、終に故人逝去の時に至つて、彌々其クライマックスに到達しました。

大正九年五月十六日、新聞紙が故人の永眠を江湖に報道するや、「西川玉之助御遺族」の宛名で、「西川君の御永眠を悼み謹みて哀悼の意を表す」と云つた弔電が舞込んで來ました。

米國諧謔文學の第一人者マーク・トウエーンが、倫敦の客舎に於て、自分の訃音を傳ふるロイテル電報を見るや、直に「余の訃音は誇大なり」との電報を發して、世界を笑

はせたと云ふ有名な話も思出されて、私も其範に倣つて見たくなり、「余は未だ生きて居る當分御厄介になる」と返電し、尙ほ私の死後に私なんかを顧みて呉れる友人の有ることを生前に知り得て大に意を強ふする、と云ふ意味の禮狀を出して置きました。

故人の店葬に列した歸るさ、私は黄昏の淡い光を浴びながら、摩耶六甲の裾野の畦道を縫ひ、青谷春日野の邊を低回逍遙して、深い感慨に耽つたことです。まだ春秋に富んだ實業界の偉人を、むぎむぎ奪ひ去つて、私のやうな老骨をして、徒に娑婆を塞がせて置く、天の攝理は不可解である。昔、大賊盜妬が長命して、亞聖顏淵が早世したので、天道是か非かの嘆きがあつたと聞きましたが、私も、何故天は斯くも人物經濟を無視するのであるかと、慨嘆したのです。出来る事なら私が身代りとなりてでも故人を生かして置きたかつたなど、近松の世話文句にでもありさうな思に耽つたのです。

然し森様、攝理が自分の思ふ様でないからといつて、天を怨むのは近眼的な人間の業でありますまいか。攝理の眞意は、一の西川氏を殺して、百の文藏氏を奮起せしめ

んこの、深き思召ではありますまいか、少くとも私は、そう信じたいと思つて居るのです。

終に臨み、優渥なる皇天の愛護の、西川文藏君の令嗣と御遺族の上に、永久にあらんことを禱ります。

西川玉之助

森 衆 郎 君

(九)

拜啓梅雨難晴候處益々御健穆奉賀候。偕今回は故西川文藏君追懷録御編輯の趣誠に結構なる御企と奉存候。就ては小生にも西川氏の美しき心立に就き感謝致居候一事有之。此御話を申上度候得共是れには勢い同氏と正反對の性格を有する人の行爲にも言及することに相成可申候に付遺憾ながら差控申候。此他には際立たる事も無之候得共。同氏は初對面の時より何となく誠に心持よき感を與ふる人にて

尙親しくなるに従ひ益々尊敬の意が篤くなり候は全く高尚なる人格の徳と可申
候甚だ申過ぎ候様なれ共日本人中にも學者中には立派なる人格の人は澤山有
之候得共遺憾ながら商人中には英國人中に見る如く澤山には無之恐らくは西川
氏の如き人格を有する人は他會社中にも稀なるべしと存候西川氏は小生を最も
良く了解し呉れたる人に有之同氏に對する敬意として拙家の佛壇には同氏の位
牌が納めありて朝夕焼香の禮を怠り不申候且小生病氣中同氏より参りたる見舞
狀は同氏の絶筆として大切に保存致居候右拙筆を省みず聊か同氏に對する感想
申述候御判讀被下度候 敬具

六月二十九日

静岡縣沼津町千本濱

足 助 太 郎

森 衆 郎 様 侍 史

(10)

五日附御芳翰拜受故西川文藏君の御永眠は君を知る者の齊しく哀悼痛惜の念に堪へざる所に有之況して日夕室を同じうし多年事を俱にせられたる老兄の御感慨は嘸かしと奉拜察候今回御追懷且は故人御遺愛のため故人の言行録御編纂の御企有之小子にも氣附候事共申越せこの御來示敬承然る處小生は多年御交際相願居候ものゝさて故人の言行として特に御報可致ものあり哉と色々相考へ候も記憶の惡數小子には頓と思ひ出し不申候是れ即ち故人の面目特色には無之哉と存候故人の性格は

穩健 質實 練達

の六字を以て盡し得んかと存候輕佻浮薄名利是れ追ふ今の世に稀に見るの重厚の士として敬服不能措もの有之候故人遺愛の御兒孫にして若し故人の此の性格を繼がれ益御修養相成候へば御家運の隆興は申迄も無之日に月に險惡に赴き居り候世道人心に裨益する所蓋し尠少なからざるもの可有之と愚考仕居候御遺族各位へ宜敷御傳へ賜り候様奉願上候 不悉

大正九年六月十八日

安宅彌吉

森 衆 郎 様 侍 史

(一一)

拜啓仕候梅雨の候に御座候處尊臺愈々御清福奉賀上候陳者故西川文藏君の儀に付ては多大の御尊慮を煩され感謝の至りに不堪候昨日は御店より御鄭重なる同君の御供養御送付被下難有奉拜受候

却説去る六日附を以て西川兄の追懷録御編輯相成候旨にて御申聞被下直に御回答可申上筈の處暫く旅行致居候爲め御貴答も不仕延引に相成候段不惡御海恕被下度候同君とは豫て御承知の通り吉田熊太郎氏と同様の最も古き友人關係に有之滋賀商業入學以來常に机を共にし室を同うし且同時に卒業致し爾來三十有餘年間我等三名は殆ど家族的の交誼を結び鼎會として尤も親敷間柄に有之候故人の行狀家庭嗜好等充分熟知致居候は勿論ながら先般御面會の節申上居候通り只

々敬服すべき偉人なりと申すより外無之特に小生は故人か友情に厚く義侠心の強かりしを感じ申候其逸事等に至りては健筆なる吉田熊太郎君を煩し感想録を貴下の御手許迄呈上致置候次第に御座候何れ拜姿の節萬々可申述不取敢御禮旁々如此御座候

大正九年六月二十一日

大 音 新 吉 拜

森 衆 郎 様

(一一)

拜呈炎暑益々相加はり申候處御變り無御座候哉御發起相成候西川君忍ぶ草に何か見參に入れ申さばやと存じつゝ近時不精に相成運筆意に適せず將又君には挿話の傳はれる又は見聞せるが少くてほんごに種に窮し申候傳ふべく賛すべきはきまじめな方面に多きこそ編者に取りての憾なるべく候

今茲に雜記帳より明治四十四年初夏に於ける拜見記を引出し御目にかかけ申候
同好の

富 閑 齋 富さん當時休業

岡田花亭 花壇をもつ故に

富永鐵堂 鐵の輸入者故に

石 亭 は 本 號

海 外 は海外を擔當の故に

私がつけし名也當時を回顧するに足る也

外に西川君手紙一通同封仕候餘は拜芝の機を期す 草々

七 月 三 十 日

前 川 清 二

森 柳 軒 様

祝世軒十二驚記

西川文藏君藏幅の富を以て關西に鳴る、祝世錄の一幅、夙に數寄者間に喧傳し、最も主人の尊重を專にせるの故に、予假りに祝世軒の號を呈す、實は主人竹を愛し脩竹の號ある也、主人予等同好の爲に、去る十一日寶庫を開きて、不出門外の數品を展せり、予如何ぞ萬障を一排して清興に侍せざるを得んや、此日御影より山脇雲洞、谷本風庵、山田回園と共に氏の邸に參すれば、新築の洋館既に初夏の裝を爲し、前庭後庭新緑方に濃かなり、岡田花亭、富閑齋、富永鐵堂、神戸より後れて到る、主人海外、石亭二子を隨へて予等を延き、香煎一啖の後、隨意に就觀せしむ。

△小間の床に、純本の幅あり、老杉數竿、蠹々として山隈に秀て、一水曲折して流れて海に入る處、暮靄遠山、遠樹を模糊の裡に罩むるの時、一個の樵夫、負荷して長橋を過ぎらんとするの圖なり、布置端嚴にして、局面小ならず、墨色滲淡の工を盡して、且市氣を絶す、想ふ雅邦得意の作と、然るに却て松年の筆なりしに先以て一驚を喫せり。

△正床に懸る長條幅は、問はずして其傳山なるを知れり、三行四十字草體の妙を極む、予曾て一たび傳山の草書を見て、神往に堪へざりし、此大作に對して、目眩み心

驚き低徊之を久しうせり。

江皐己仲春、花下復清晨、仰面貪看鳥、回頭錯應人、讀書難字過、對酒滿壺頻、近識峨眉老、知事嬾是真。

△次で驚きしは、菰翁瀑布の圖なり、經營の大氣運の雄は言はずもがな、遠く之を望めば、看る看る深山に雲動き、茂林に風を催うし來る、若し夫れ盛夏鑠金の日、一たび此圖を展するあらば、冷味颯爽として立地に熱人を清新せん、辭に曰く、播州の硯北小隱に遊ぶの時、炎暑に堪へず、偶々之を試む、畫の巧と拙と論ずる所に非ざるなり云々焉、ぞ知らむ、作者此圖に會心するあり、曠々者流の容喙を許さざる主張あることを、國華社は之を菰翁傑作中の尤として、近く世に紹介すべしとなり。

△王鐸の書帖は、博士前田慧雲氏が天下の珍として、激賞する所、唐宋數十家の筆を臨せしもの、四冊より成り、草體多し、放奔なるあり、流麗なるあり、奇拔なるあり、朴茂なるあり、或は老蒼、或は溫藉、或は豪宕、或は渾厚、一として神を傳へざる莫し、而して予が驚きしは、諸體の中一貫の手法の相通ぜること、是れなり。

△崋山の一葉竹は、由來、斯界に雄視せるもの、梅道人の意に倣ひ、三尺の老竿と少

竿を逆まに拈出し來り、小竿枝頭に僅に濃き一大葉を着く、落筆俊逸にして意匠超邁す、眞個氣韻を以て獨歩するもの乎、此圖二様の係詞を添へ得て一段の重を加ふ。

△應舉の飲中八仙に大雅の歌を冠せるもの、又太だ尙むべし、圖中の人物個々活躍し、就中李白の眉目生氣人に迫るあり、大雅の篆書濶達老蒼にして錦上花を添ふる底、主人の眼識斯の佳品を逸せざる亦一驚に値す。

△同好が一齊に驚きしは山陽外史の條幅とす、賴氏代表的の作に屬し、詩書双絶す、昨年大阪觀鷺會主催の山陽海屋書會に於て嘖々の評を占めしも宜なり。

南坨北坨春雨足、隔岸青山如新浴、知得江水長魚苗、江亭與誰傾春醪、日暖東風吹江皺、柳色未如水性綠

△梅厓の七絶草書、品位に於て能く山陽に對峙す、少數の鑑尙家は或は彼を去り此に就くことあらむ。

別院深々夏簾清、石榴開遍透簾明、樹陰滿地日卓午、夢覺流鶯時一聲
始め梅厓大和飯井氏の爲に物し、後紀伊古座の佐藤氏に嫁し、梅厓の逸品として

世に知られしものと云ふ。

△祝世録の大幅は懇請によりて展せられぬ、長七尺有餘、巾四尺許、

竹門秋掩夕光沈、跡斷歸樵落葉深、手約亂書高自枕、臥聽寒雨十年心、

世録此書を作す時、官諫議大夫に列す、莊重高邁の氣自ら人をして襟を正さしむる偶然ならずと謂ふべし、書者因人重人者因書重、予此書によりて之を知る、四明啓の手記に曰ふ、庵原澄門堂の秘藏字勢遒逸氣品高古無些拘束、可枝山之亞者也と、予未だ其十分を道破せざるを憾む、此幅や土佐容堂公の秘愛なりしが、四十二年の秋終に主人に歸す、土居香國、芳川笛村二老曾て一觀して驚嘆せり、容堂公が勉勵して之を模したるもの、大阪右近氏に傳ふと云ふ。

△祝枝山の一卷は復た同好を驚倒せしめたるものゝ一なり、此草書の如きは、巧盡きて拙出で、醇究りて朴に入るとや云はん、予眼低く識淺く徒に寶山空手の嘆を爲すのみ。

△容堂公の鮫州漁史と歛せる草書三行あり、

曾罵趙家香駭兒、奮然東向欲扶危、風鶴不分驚走裏、鞭聲肅々暮容垂

書風山陽壯時の筆法を得、之を行るに風雲の慨を以てし、卓犖英發優に一家を爲せり、亦書人に因りて重きを見るなり。

△盛茂曄の畫帖は、金箋紙本六幀を收め、畫題春色より雪景に及ぶ、其設色、其筆致北歐の古畫を見るの感あり。

寧一山の風竹、方以智の墨竹、吳彬の達摩、華山の歲寒三友、燕村の童子、應舉の瀑布、椿山の老松花鳥、蘆雪の墨竹、即非の松濤二字、春水の學以致其道五字、海屋の詩畫及七絶書、龍椿の楠公圖に茶山が七絶山陽が長篇を題せるもの等、皆貪看を禁じ難き所、應接多端にして今仔細に留記せず、夫の溫潤玉を現せる青磁香爐、碧潭の色を湛へたる水銀銅瓶の如きは、門外漢たる予唯點頭して過ぐるの外なかりき、主人年少夙く斯の好尚と藏品とあり、他日の造詣眞に畏るべし、若し能く樂みて而して淫せずんば、清福長く君家に在るを疑はざる也。

(四十四年六月十二日稿)

(二三)

拜復梅天鬱陶敷候處愈御清勝奉賀候然、は故西川氏の逸事御蒐集の由隨喜の至に

候拙者は十餘年前故山脇賢次郎君の案内にて同氏の宅に於て所藏の書畫拜見致し其後一回會面致したる位の事にて深交有之候にては無之依而同君の逸事等は無論承知不仕候

只同氏の温厚高雅の風采其他門庭家屋等より茶具火鉢の類に至るまで風流を極め數寄を凝らせたるには敬服致候但し佛法の趣味は有之たる哉否一言右に話し到らざるは今に遺憾に奉存候 右拜答迄草布

六月十五日

前 田 慧 雲

森 衆 郎 様

(一四)

拜啓歳末に際し御動履愈々御清穆奉賀上候陳者曩に故西川文藏氏逸事御編纂に付寄稿方御案内に接し居候處今夏以來社務を帶びて滿洲沿線及内地等旅行を續

け居たるこ且は同氏御在世中御接近の時機短少にして乍遺憾逸事として御送稿
 申上ぐる程記憶無之候得共小生も同氏配下の一人として尠からぬ御恩顧を辱う
 し日夜御在世當時の御高風を欣慕致居候次第に御座候就ては聊かたりとも今度
 貴舉に参加し同氏の温容見るか如き徳望を頌し偉靈に報度左に一絶を賦し御集
 稿の一端を汚し度不堪切望候微意御採用を得ば幸甚此事に御座候先は乍延引御
 返事申上候 頓首

十二月廿三日

長 春

千 葉 泰 治

森 衆 郎 様 侍 史

懷故西川文藏氏

禮樂縱橫字三千 學求不厭志彌堅

一生功業超凡百 萬象包羅列古賢

紅紫凋落の時節忽ち西川文藏君の訃音に接す驚駭此の儀に候抑も同君温厚優雅の品は之を天賦に稟け機敏明透の才は之を経験より獲られ人高く節潔く誠に貴商店の柱石也小生は同君の知を辱うし特に學校在職の時代より子弟の貴商店に入り御教訓竝御指導を受け候者尠からす幸に皆大過なく今日あるを致し候は同君に負ふ所多し其恩や忘るゝ能はさる所に候而も今や再ひ見るへからす遺憾此事に候茲に謹て御同情を表し御痛悼を共に致し候

五月十九日

高 知

横 山 又 吉

森 衆 郎 殿

(一六)

拜啓益々御清適の段奉賀候陳者前支配人西川文藏氏弔報は實に餘りの不意にて驚入候此度は尊臺の手に於て追懷録を作成被成候事は實に美學にて双手を擧げて賛成する次第に御座候小生の感じたる同氏の美點は數ある中濃厚なる温情を有する事にて何時面會するも常に相手の心中に入り萬事同情的態度を以て面倒を見る事に候第二は十年一日の如く勤勉せられし事に候此事たるや非常なる忍耐と勇氣無き限り常人の容易に實行出來さるものに候同氏が二十數年の久しき一日の如く鈴木商店に一身を捧げし事は敬服の外無之候斯の如く崇高なる人格を有する同氏を亡ひしは鈴木商店の大損害にて惜みても猶ほ餘り有り候茲に謹んで感じたるまゝを一書申上候 拜具

六月十四日

毛 利 三 郎

森 衆 郎 様 尊 下

大正十年八月十日印刷
大正十年八月十五日發行

非賣品

印刷者 谷口默次

大阪市北區堂島裏三丁目

印刷所 谷口印刷所

大阪市北區堂島裏三丁目

編輯兼
發行者

森 衆 郎

神戸市海岸通十番地

脩竹餘韻正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一六	六	呼	呼び。	一九九	一	鉛意	銳意。	三七三	六	補佐	輔佐。
二〇	二	魚肉一切	魚肉一片。	二二二	二	東京	東京。	三七六	一	ななぬ	ならぬ
二〇	二	鰈一切	鰈一片。	二二三	三	死くした	亡くした	三八四	三	切角	折角。
二二	一	鰈一切	鰈一片。	二二六	一三	白します	白します	三八九	一	人ご	人に。
二二	二	牛肉	牛乳。	二二〇	末	グレイ	グレイ。	三八九	一	自己	自己。
二四	一四	上をつかはる上げをつかはる		二二六	二	さうに	さうも。	四一	七	補佐	輔佐。
二七	一三	大根一切	大根一片。	二三九	六	桂幅	桂幅。	四一	一	鳥	鳥。
五五	九	強い	強い。	二四四	一三	計算上	計算用。	四二四	一三	最早	最早。
七六	七	獸肉	肉。	二六三	三	逕を成す	蹊を成す	四四四	一	茶山花	山茶花。
一〇七	六	昂進	昂進。	二六七	五	一日の	一日の	四四九	三	戴	戴。
一一〇	一	酒落	洒落。	二六八	二	字之助	宇之助。	四六八	五	逝きしにより	逝きしより
一一四	一三	惆みて	惆みて。	二七三	七	葉茶	茶葉。	四七六	一四	零圍氣	零圍氣。
一二二	六	余等	余等。	二九二	四	迫悼	追悼。	四八〇	三	催に	僅に。
一三六	七	辭じ	辭し。	二九四	二	當人	當時。	四八二	一	疲勞	疲勞。
一三七	九	揚弓	楊弓。	三〇〇	二	情誼	情誼。	四八三	一〇	行つて	行つて。
一三八	八	揚梅	楊梅。	三一一	一	二十	二十七。	四八四	一	豫料	豫料。
一三九	一	揚梅	楊梅。	三二六	一四	茲母	慈母。	五〇一	一三	理屈	理屈。
一四〇	四	揚梅	楊梅。	三二七	一	謹んで	謹んで。	五〇二	四	記憶	記憶。
一五二	四	店にて	店にて。	三三二	九	折等	折など。	五一	一	め	諦め。
一七〇	一	綱引天神	綱敷天神。	三三三	五	烏鬼	烏鬼。	五一	一〇	折柄	折柄。
一八三	一	西牧君	石牧君。	三三七	八	割策	畫策。	五二	三	揚る	揚る。
一九五	八	うれし	うれし。	三四二	一〇	杯	杯。	五二	一	一對五	一對四。
				三四九	二	遭うた	會うた	五三	一	余は	余は。
				三五	一四	觸目	觸目。	五四	八	すはから	するから
				三六七	七	己に	己に。	五五	五	活躍し	活躍し



流水生澹書
浮雲生筆意